



「現場」で気づかされたこと

浅羽 俊一郎(東京山手クラブ)

東京山手ワイズメンズクラブの浅羽俊一郎です。本日はアジア賞受賞された皆様、本当におめでとうございます。ワイズメンの皆さんと多くの留学生の皆さんにお話する機会を与えて頂きました。光栄です。ありがとうございます。

ところで、松本市内を歩いたのは今日が初めてです。明日は中学時代から見たいと思っていた「松本城」を見ようと思います。それから私はサッカーのことあまり知りませんが、「松本山雅 FC」の J1昇格おめでとうございます。私の住む埼玉には浦和レッズがありますが、興奮しやすいファンが多い、ということで有名らしいです。

さて、今日は 私が体験したこと、気づいたことを5つ程お話しします。

- 1) まず子供時代のニューヨーク体験、
- 2) 次は私が働いた UNHCR(国連難民高等弁務官事務所)という職場のこと、
- 3) 3 つ目は私のボスニア・ヘルツェゴヴィナでの体験。
- 4) 4 つ目は今 YMCA で提案していること、
- 5) 5 つ目は最近気がついたことを1つ紹介します。

本題に入る前に、留学生の皆さんにちょっと一言。皆さんは「一期一会」という言葉を知っていますか。私は言葉は知っていましたが、意味を知ったのは ほんの数年前です。「あなたとこうして出会っているこの時間は、二度と巡って来ないたった一度きりのものです。だから、このひとときを大切にしましょう」という千利休の

言葉だそうです。皆さんと私が今日ここで出会えたのは、松本ワイズメンの皆さんのご好意によります。この出会いがそれだけで終わってしまうかもしれません。あるいは忘れた頃、何か素晴らしい実を結ぶかも知れません。皆さんと私は年齢も違えば、住んでいる場所も違うから、また会うチャンスは少ないでしょう。そんなつもりで、お話ししたいと思います。

さて、私は昭和25年、1950年の生まれです。父は戦艦大和の生き残りでした。3300人の乗組員のうち、生き残ったのは800人。父もその一人で、そのお陰で私も今ここにいるんです。

父はその後外交官になり、私が小学校2年生のとき、家族はニューヨークに引っ越しました。通った小学校で日本人は私と妹の二人だけでした。当時テレビでは盛んに戦争映画を上映し、私は近所の子供たちに「ジャップ・ジャップ」って呼ばれ、クラスでも時々いじめられました。でも、友達も沢山出来ました。クラスメートは祖先が色々な国から来た移民で、まさにニューヨークは人種のるつぼだ、ということがよく分かりました。小さい時から多民族の中で生活していると、アイデンティティがはっきりするだけでなく、人種や民族のトラブルを回避するコツが身に付くと思います。そのためにも、家の中で人種差別的な話をしないことです。子供は知らないうちに影響受けます。ボスニアがそうでした。

友達の中でもロバートとは特に仲良しでした。1962年以来、音信不通でしたが、7年前インターネットで同じ名前を発見し、メールで彼であることが分かりました。50年ぶりにおさな友達とつながったのです。そしてこの夏、YMCAの世界大会でアメリカのコロラドに行った帰りにニューヨークに寄って、ロバートと再会を果たしました。はげ上が

ったおっちゃん同士、話はずきませんでした。今年最も嬉しかったことです。小学校6年生で帰国した後は、ずうっと日本で過ごしました。全寮制の高校で3年間生活し、大学を卒業して、9年間東京YMCAで働いたあと、UNHCRに転職し、その後23年間、主に外国で難民支援の仕事をしてきました。退職してからはYMCAのボランティアをしています。

UNHCRの仕事というのは国境を越えて逃げてきた難民を保護し生活支援することです。大勢の仲間が世界各地の難民がいる現場に張り付いて働いています。シリア難民のような緊急支援もあれば、難民キャンプの運営もあります。(アフガン難民キャンプは35年続いています)、カンボジア難民のように本国帰還を手伝うこともあります。最近は紛争地帯や国内の避難民をも支援します。

職員にとって「現場」が大切です。現場に必要な基礎技術は「モニタリング」です。例えばプログラムの進捗はどうか、小学校の出席率はいいか、医薬品はきちんと管理されているか、地元住民とトラブルはないか、女性は虐げられていないか、食糧は家族にきちんと配給されているか、NGOの資金管理はどうか、ある程度キャンプや地域の実態や委託NGOの力量を把握していなければならないのです。プログラムの予算も頭に入れておかねばならないのです。悪さをしたい連中は、こちらがモニタリングの手を上げばすぐごまかそうとします。難民から情報を取るのも手腕です。資金が集まらなくて、支援できなくなっても世界に向けて難民の現状を発信し続ける必要があるのです。

現場では様々な人と出会い、そして協力します。地元の役人、NGOの職員やジャーナリストとも関

わります。アンジェリーナ・ジョリーにも会えます。なんといっても楽しいのは現場で生まれる同僚たちとの友情です。専門職は多国籍です。彼らの多くは現場好き、議論好き、酒好きでした。特に紛争地で苦勞をともにすると、仲間意識が強くなります。

私の最後の勤務はパキスタンのクエッタ事務所の所長でした。職員が多い時で100人以上いました。地元職員だけでも複数の民族、3つの宗派(スンニ派、シーア派、クリスチャン)、専門職は多い時で私が日本から来ているほか14の国籍から来ていました。人種のるつぼというか、小さな国際社会でした。文化の違い、意見の違いを認めつつ、仕事し、友情が生まれる。えがたい体験でした。日本社会は、何となく分かり合える、空気が読める社会ですが、グローバルな市民を育てるには向かない。理屈ではない。感覚です。やはり多国籍・多文化な環境が必要です。

因みに、日本はUNHCRへの拠出金額が世界第3位です。しかし、日本政府は海外での難民事業にはお金を出しても、国内には難民を入れない、というイメージが今や固まってしまいました。残念ですね。去年3260人の難民申請に対して、6人しか認定していません。観光客受け入れには力を入れても、迫害を逃れて来た人には関心がないのでしょうか。日本は過去に300万の引揚者たちの辛い体験がありました。あの体験を思えば、難民の苦しみ分かるはずです。聖書の言葉を思い出します「あなたたちは寄留者を愛しなさい。あなたたちもエジプトの国で寄留者であった」(申命記10:19) 救われない人を拒んで恨まれるより、受け入れて感謝される方がいいですよ。

ところで40近くある国連機関の中でUNHCRにだけ固有の特色が3つあります。一つは活動資金の98パーセントが各国からの任意の拠出金、つまり政府の寄付金と、一般からの募金です。もう一つは国連機関はどの国にあっても、その国民のためにサービスを提供しますが、UNHCRだけは「難民」と呼ばれる外国人のために事務所を開いています。だから、どこの政府とも緊張関係にあります。(地元職員が政府から圧力かけられること、決して珍しくないのです。)3つ目は国連機関の中で唯一「一人ひとりの個人」を大切にします。どの国に置かれたUNHCRも求められれば難民を面接し、カルテを作成します。勿論秘密厳守です。手前味噌ですが、国連の中では一番人間味あふれる組織でしょう。当初は1954年に解散するはずでしたが、なんと60年過ぎました。実は、世界から紛争や迫害が無くなれば、いらなくなる組織なのです。

UNHCRの現場の話です。今はシリアが大変なことになっていますが、私に関わったボスニア・ヘルツェゴビナのことを紹介します。私は1998年の秋から2001年の秋まで首都サラエボにプログラム全般の統括として行っていました。15年前です。ここでのある体験を話しますが、その前に、ボスニア戦争のことを少しおさらいしましょう。正しくはボスニア・ヘルツェゴヴィナです。ボスニアはアドリア海と接し、東のセルビア、西のクロアチアに挟まれた小さな国です。九州くらいの大きさです。今は無きユーゴスラビアという国を構成する、6つの共和国の一つでした。20世紀の最後に来て、いくつかの共和国が分離独立し、ボスニアも1992年に独立を宣言しました。ボスニアはイスラム教のボスニャック人、ギリシャ正教のセルビア人、カトリックのクロアチア人、という3つの民族が

平和に共存していましたのが独立をきっかけに三つどもえの内戦に発展しました。仲良かった近所の人達が殺し合うようになりました。ボスニア戦争を象徴する言葉が「民族浄化」でした。ある地域から一つの民族が武力でほかの二つの民族を追い出し、空いたところに自分の民族を呼び寄せて、そうしてじわじわと領域を広げていくのです。

3年後の1995年、民族間の憎悪を残したまま、この勝ち組のない戦争は終わりました。終わったとき、国は3つに線引きされていました。セルビアと接する東側がセルビア人の地域、西がクロアチア人の地域、それ以外がボスニャックの地域に変わっていました。人々はこのまま待っていれば生活再建のための援助が海外から送られて来るものと期待しました。ところが、国際社会は「待った」をかけたのです。国が民族別に分断されたままでは援助はしませんよ、以前いた町や村に帰ってください、帰った地域を優先的に援助します、と言いました。「自分たちを追い出し、家族を殺した連中が住むところに戻って言うのか？自分の家に住み込んでいる人達をどう追い出すんだ？今のままでいいじゃないか」でも国際社会はその方針を変えませんでした。何故でしょうか。それは将来他の国で民族紛争が起きたとき、民族別に領地獲得するような真似をさせないためでした。ボスニアに後に悔いを残すような前例を作りたくなかったのです。当初どの民族も抵抗しました。でも次第に年寄りから村に帰ろう、という気運が生まれました。結局、政治に踊らされて、国中破壊しあって最後は元の家に戻っただけの、実に無意味で悲しい戦争だったと、誰もが気がつきました。

余談ですが、JICAはこの頃ボスニアに小学校を建造する計画でしたが、その基本的な発想は民族別に棲み分けされた3地域に同じ数の学校を寄贈するというものでした。今までの話でお気づきでしょうが、この考えは国際社会の方針に逆行するものです。元いた地域に帰還してもらおう、というのが国際社会の選択だったのに対して、民族別に公平に援助するというのは現状肯定—即ち、帰還する必要なし—になるからです。日本人のコンサルタントからその話を聞かされたので早急に現場を確認を取ったところ、案の定一様に懸念の返事が返ってきました。時間はかかりましたが、結局JICAは計画を変更してくれました。

さて、人々の帰還を促進・支援する仕事を任されたのがUNHCRでした。戦争中は人道支援で人々から信頼されていました。緒方貞子高等弁務官は英雄でした。それが今度は帰りたい人達と、彼らを妨害する人達をどう一緒に生活させるか、危険の伴う根気のいる仕事でした。UNHCRは人々の流れを考えて、要所要所に地方事務所や小さな出張所を約30箇所設け、300人近い職員が張りついていました。私が着任した頃は地域によっては人々の移動も大きくなっていました。私の仕事はボスニアでの帰還支援事業でしたが、1999年4月からはコソボ難民がボスニアにも流れて来たのでその緊急援助活動も私の管轄になりました。

さて、地方の出張所には外国人スタッフが2-3人配置されました。民族間のしこりがあるので地元職員の配置については人事はとても気を配りました。多くの外国人スタッフは30才前後の若い国連ボランティアで、「フィールドモニター」と呼んでいました。国籍もまちまちでした。毎日のように

村や町に行き、一軒一軒住民と話し、不法占拠している者には、明け渡すよう説得する、手間のかかる仕事でした。私も地方を回って人々と話しました。ある家に来たら、外に中年の男が立っていました。「家主か」「違う」中から中年の女性が出てきました。家主です。「あの男は誰」と聞くと、最近まで不法占拠していた人だけけれど、自分の家は破壊されていて帰れない。可哀想だから一部屋使わせている、というのです。やりきれない思いでした。またある朝、警察からの連絡である村に行き、年配の夫婦を訪ねました。やっと我家に帰って来たが、自分たちを追い出したい若者達が、真夜中にやって来て家を取り囲んで、自分たちの民族を謳歌する歌で威嚇したというのです。ヘイトスピーチです。

サラエボに来て2年経ちました。終戦から4年経っても人々が様々な複雑な問題に悩んでいることが分かりました。これが難民キャンプならば、救援物資とサービスを提供すれば、難民同士互いに支え合います。フィールドモニターの仕事の難しさ、治安の悪さ、孤立している環境を思うと、どうやって彼らをサポート出来るか考えました。そこで思いついたのが、モニターたちを全員、サラエボに招集することでした。日頃会うこともないモニター同士が知り合ってホンネで話せる場を用意することでした。想像してみてください。小さな出張所で上司と2人。不信の目で見える地元の人達。しんどいですよね。

いよいよ、第1回モニター連絡調整会議です。各地からモニターたちが続々到着しました。日頃現場に行けないサラエボ事務所のスタッフも参加して、一堂に会したのです。50-60人以上いたと思います。代表が挨拶し、本部の新しい動き、安全管理等のプレゼンテーションに続いて各地

の報告と意見交換。初めは緊張していたモニターたちも徐々に心を開いて日々直面する問題を語り始めました。出張所からのレポートには書けないデリケートな問題も分かりました。今も覚えています、若い女性モニターが発言しました。

「私は定期的に巡回して人々の生活を見えます。以前は家庭訪問に際して、時々救援物資を配りましたが、最近是在庫もなく、先日ある家に行ったら『私たちが何だと思っている？見せ物じゃない！』と怒鳴られました。モニタリングが今とても辛い」と泣き出したのです。終戦から4年。ようやくこのような場が設けられたのです。モニター連絡会議は好評でその後、年2回場所を変えて開催されるようになりました。

ところで、何故こんな話をしたか。それは紛争地域で多くの若者がUNHCRやNGOで人道支援に体を張って頑張っていること、人道支援の現場は生命の維持、救援物資の配布だけではなく、具体的個人に関わり、まさに顔が見え、人と人が触れ合う場だということを知ってもらいたかったからです。これこそ人道です。過去にある総理大臣が「日本は人道大国だ」と言いました。彼は人道支援はお金の問題だ、と思っていたようです。東日本のことを考えてみて下さい。

4つ目の話です。私はUNHCRを辞めて「考える時間」が増えて、色々思いつき、また気づかされます。2年前にYMCAのことで思いついたことをシェアしたいと思います。いきなり世界観の話になりますが、私たち人類の歴史はいつの時代でも「俺たち 対 あいつ等」「味方と敵」「勝ち組 と負け組」というようにどこかに対立グループを設定して世の中を見て、世の中を動かしてきました。国際協力でも先進国 対 途上国というふうに分

けてきました。相手もこちらを「あいつ等」と見ます。そこには溝や壁ができます。地域社会でも同じでしょう。

そこで考えました。YMCAは世の中を別の方法で見られないか。溝を飛び超えてあいつ等を仲間にし、「私たちの輪」を広げるという発想を持つたらどうか、というのです。具体的には

1) 先ず 私たちグループ と 彼らグループ を 特定します。英語ではWe と Them

2) 次に、私たちは彼らに歩み寄って声をかけて、同じ土俵の上で向き合います。これで彼らは 君たち に変わりました。We と Themが We と You になったのです。

3) 互いの理解が深まったところで同じ方向を向いて一緒に何かしよう、と行動を起こします。英語では Let Us、Let's です。

4) いつの間にか、彼らグループは 私たち の中に取り込まれました。私たちが拡大したのです。一回り大きくなったWEは次の あいつ等 を探します。私はこのプロセスを「WE-ing」と名づけました。

大切なのは「声をかける」「土俵で向き合う」そして「一緒に行動する」です。来る者は拒まず、ではなく、こちらから出向くのです。今はYMCAもワイズも内向きで「出て行って、声をかける」のが苦手なようです。「Good news良きおとずれ」を来た人にだけ伝えるのではなく、出て行って伝えるのが本来のYMCAスタイル、ワイズ・スタイルではないでしょうか。

この夏アメリカでのYMCA世界大会に参加した、と言いました。世代を超えて世界中から集まった1400人の参加者が60ほどのグループに分かれて毎日協議しました。私は自分のグループでこの「WE-ing」を紹介しました。YMCAこそWEの輪

をひろげよう。そしたら「それ、面白いね」ということとなり、最後の報告会ではそれを発表しました。見ず知らずだった15人が同じ土俵で協議し、同じ方向に向かって行動し、最後は大きなWEになっていたのです。ちょっといい話だともおもいませんか。帰国後WE-ingの指サインを思いつきました。どうです。(指で “We” サイン)分かりますか？

今考えていることを1つ紹介します。64年間自分自身を演じてきましたから自分の癖や弱点はある程度分かっています。私の癖は何か新しいことを始めたいこと。弱点は一人ではやりたくないことです。それが去年解決しました。簡単なことでした。良いアイデアは 協力してくれる仲間が見つかるまで しつこく発信し続ける ことでした。

実はこのことに気がつくきっかけがあったのです。YMCAのボランティアを始めてからキャンプソングはキャンパーや若者が歌うだけのものならもったいない。キャンプソングをちゃんと保存して、新しい歌も集めて広めるべきだ と考えたのです。でも YMCAの友人たちは反応しませんでした。

ところが去年の春、YMCAのあるイベントの後、先輩3人と居酒屋に行き、そこで、なにげなく自分のキャンプソングへの思いをしゃべったのです。驚いたことに先輩3人が、「面白い。キャンプソングの会をたちあげよう」と言ったのです。その場でキャンプソングの会が出来ました。私が考えたよりもっと良い案が生まれたのです。その後、様々な偶然と恵みに支えられて(神さまの奇きみ業で)今はキャンプソングの会のフェースブックに大勢の人達が登録してくれています。また、先月の日本YMCA大会では初めて「キャンプソングナイト」というイベントが実現し、集まった若い人からお年寄りまで一緒に大声で歌いました。

良いと思うことは発信し続けることです。特に若者はあきらめては駄目です。仲間を探しましょう。仲間が出来たら Let's しましょう。We-ing しましょう。

今日は自分のしたこと、考えたことを5つ話しました。それぞれ関連はありませんが、あえて言えば共通のキーワード それは「現場」と「気づかされた」ということです。「教わった」のとはちがいます。ずうっとそこにありながら、見えていなかったことが見えた、ということです。私たち一人ひとり、現場にあつてやりたいけれど出来ないこと、解決したいけれど出来ないこと、あると思います。もしかしたら、見方、考え方を変えたら出来ることを、気づいていないだけかもしれません。そう思うと少し元気になれそうです。

さあ、あと4日でクリスマス・イブです。イエス・キリストのお誕生日です。クリスチャンにとってはこの世の中のことを何よりも心配して下さる神さまが人々の間に来られた、という グッドニュース 良きおとずれ です。あいにくこれは教わることでなく、まさに「気づかされる」ことです。暗いニュースが多いこのごろですが、闇に負けないで小さく光っているものがあると気がつきたいものです。そして気がついたことは、良いことだったら「宝もの」のように地面に隠したりしないで、「種」のように地面に植えてそこから実るようにさせて下さい。しっかり育てて下さい。

アジア賞、受賞者の皆さん、参加された皆さん、このプログラムを続けておられるワイズメンの皆さん、もう一度おめでとございます。そしてありがとうございました。

(2014年12月20日

松本クラブ・第16回アジア賞授賞式講演)